「現代医学」に新たなページを開く
「上腹部の柔軟性」②

「からだ」の「はたらき」の原動力
「消化管の運動機能」と「体液の循環と対流」

「現代医学」がおちいっている迷路からどうぬけ出すか
「現代医学」のすばらしさをどう生かすか

ある日、小学4年の次女の理科の授業参観がありました。その授業中の実験を見てハッとしました。「頭寒足熱」・「冷え・のぼせ」とはこのことだなと思い当たりました。その実験は「水の対流」という現象（図1・注1）についてでした。私自身の日頃の臨床経験からまさに、人間にも全く同じことが起こっていると感じとりました。私たちは、人体の「しくみ」や「はたらき」については解剖学や生理学の知識があるばっかりに、心臓を中心とする「血液」の「循環」ばかりに考えが囚われてしまいがちです。しかしこの「水の対流」の実験を見ていると人体に「循環」、していのは「血液」ばかりではないなということがよく分かりました。また、「血液」を含む体液」の「循環」、以外に、もっと基本的な「体液の対流」現象があるのではないかと、新たな発想が湧いてきたのです。

その「体液の循環と対流」の度合いは「上腹部の柔軟性」にあらわれることを、長年の臨床の経験から私は確信しておりました。そのことを日本医学会総会で名古屋大学医学部の生田幸士教授に話したところ、生田教授はその本質を適確に理解されました。そこから「上腹部の柔軟性」を計る測定装置とシステム開発の共同研究がたまごビルと名古屋大学医学部で始まりました。今では、すでに名古屋大学工学部・医学部の倫理審査を通り、この共同研究のデータの蓄積と分析に移っています。

【Ⅰ「頭寒足熱・冷えのぼせ」と「上腹部の柔軟性」】

「頭寒足熱」とはよく言ったものです。「健康な人は頭が涼しく足が温かい」とは、古来からの人間レベルの観察から来ているものです。実際、元気な人は頭と足の温度差は小さく、逆に体の状態の悪い人は「冷えのぼせ」の状態です。足が冷たく頭の温度が上がっています。実際ROB治療させていただくと症状が良くなるにつれ、「上腹部の柔軟性」が出現し、足の温度が上がり、逆に頭の温度が下がり、頭と足の温度が相互に接近してゆくのが観察されます。

【Ⅱ「いのち」をつなぐ「はたらき」と「かたち」の関係】

牛には牛の「かたち」があり、人間には人間の「かたち」があります。確かにそれぞれに「かたち」の違いはありません。しかし、それぞれの「生きもの」が「取り込み・消化・吸収・排泄」し、「いのち」をつないできたことに変わりはありません。牛・人間・昆虫がそれぞれのありかたで「腸管」をもっていることに変わりはありません。「かたち」は変わっていても牛・人間・昆虫それぞれの「いのち」をつなぐ「はたらき」は同じなのです。

とすると、牛・人間・昆虫に共通する「はたらき」の原型すなわち元の「かたち」はどういうものだったのでしょうか？

それが「たまご」なのです。卵子です。球形なのです。私たち人間もその生物としての発生の最初のスタートは卵子としてある球形です。牛も昆虫もそうなのです。受精して卵割・原腸形成・器官形成を経て（注2）、そのそれぞれの「種」そのものの「かたち」となってゆきます（注3）。「種」そのものの、つまり牛は牛、人間は人間、昆虫は昆虫の「かたち」となってゆくのです。現在ある牛・人間・昆虫の「かたち」はその「たまもの」です。その意味で単一の細胞からなる原初の生命の「はたらき」を知るには、球状の状態でどういう現象がおきるかを見てゆく必要があります。

【Ⅲ「生命」とは】

「生命」とは何ぞや、とはよく問われることです。私は「生命」とは、

①膜（まく）をもって周囲の外の世界とは、独立した空間を維持している。

②外の世界より、必要なものを内の世界に取り入れ・不要なものを排出する。

③繁殖をする。

④世代の交代を通して、「いのち」をつなぎ、「いのち」をつなぐために進化するものである。

と考えています。

それらの生命の本質の中でも、一番大事な特徴は、膜をもって外の世界と内の世界を区別し、必要なものを外の世界より取り込み、不要なものを外に排出する作用です。この作用によって内部環境を一定に保ち、なによりも、自らの「いのち」をつなぐということができるのです。

原初の生命そのものが、最初からそのシステムをもっていたかというと、そうではないと思います。膜を隔てた状態で「たまたま」必要な物が入り、その「たまたま」の重なりを「からだ」が覚え、その「いのち」をつなぐのには非常に大事な「たまたま」をより適確に獲得できるようにその「はたらき」を促してきたのです。現在の日本の医学により必要なことは、社会生活を営む人間が「人生を楽しんでいるのか」というマクロの目です。その目を養成するには、生命の発生以来「生きもの」がもつこの球形の「はたらき」の特質を大胆にとらえる必要があります。

【Ⅳ 球形の中でおこる「対流」】

かたい岩石からなる地球内部の「マントル」が、地球の内部で「対流」の形で移動しています。この現象が大陸移動の原動力なのです（図2―1・2注4）。計算上では1年間で3㌢動くのです。マントルの中を上から下まで動くのにかかる時間は約1億年、約3000㌔㍍を移動するのです。想像しがたい時間と距離ですね。

このように地球の内部でも温度差が、かたい岩石からなる「マントル」を上下に移動させる原動力となっているのです。身近な生活の例としては「空気の対流」による移動（図3）があります。水の対流・空気の対流とおなじことが、地球内部のマントルで起こっているのです。水分が約70％の人間の「からだ」でもおなじことが起こってあたりまえです。

私たち人間は、牛であれ、人間であれ、昆虫であれ一種」として特有の「かたち」があるため、もともとは球形の卵子が変形して進化してそれぞれ特有の「かたち」になっているのを、つい忘れがちです。

また、それぞれの「かたち」が「はたらき」としては球形がもつ「はたらき」と同じであることを私たちは見逃してしまいます。人体の部分を細かく分析する現代医学のミクロの目は、もちろん必要です。しかし、現在の日本の医学により必要なことは、社会生活を営む人間が「人生を楽しんでいるのか」というマクロの目です。その目を養成するには、生命の発生以来「生きもの」がもつこの球形の「はたらき」の特質を大胆にとらえる必要があります。

【Ⅴ「消化管の運動機能」と「体液の循環と対流」】

この球形がもつ「はたらき」の特徴が、原初の生命から現在の私たちにつらなっているのです。

その「はたらき」とは

①「取り込み・消化・吸収・排泄」を行う「はたらき」であり、現在の「生きもの」に脈々とつながる「消化管の運動機能」

②また内の世界の動きの原動力としての「はたらき」である「体液の循環と対流」

なのです。

この二つが、原初の生命体から今日に至るまでのすべての生命現象の根幹であり原動力であると私は思います。「取り込み・消化・吸収・排泄」をうながすため、「体液の対流現象」を利用した「循環」という大切な「しくみ」ができたのでしょう。その本質は、内の世界の環境を維持する（「いのち」をつなぐ）ために「取り込み・消化・吸収・排泄」をする必要があったのです。その「はたらき」を促進するために、その当時の地球環境の温度・気圧等の自然の力の影響を受けた「体液の対流」を端緒にしてできたのです。現在ある牛・人間・昆虫の「かたち」はその「たまもの」です。その意味で単一の細胞からなる原初の生命の「はたらき」を知るには、球状の状態でどういう現象がおきるかを見てゆく必要があります。

「循環」の「しくみ」ができたのでしょう。

多細胞生物にとっても「取り込み・消化・吸収・排泄」が「いのち」をつなぐ一番の「はたらき」に変わりはありません。その一番安全で効率のよいシステムが「一本の管」であったのです。口から「取り込まれ、消化・吸収・排泄」していく「腸管」です。この「取り込み・消化・吸収・排泄」のための管は一番安全・安定した効率のよいシステムであるために、ほとんどの動物に発生期に「原腸形成」という現象があるのです。有名な発生学者で著述家でもあるルイス・ウォルパートは、「人間の一生で本当に最も重要な時期は、誕生でも結婚でも死でもない。それは原腸形成である」と述べています。

この「いのち」をつなぐ大事な「はたらき」をもつ「腸管」をより生かすために、「腸管」の先頭に神経のセンサーができ、口から入るものが確かなものであるかどうかを確認する必要がありました。その神経センサーのかたまりが「脳」のはじまりです。「腸管」を過不足なく動かすために、「自律神経」ができ、「体液の対流」をほじまりとする循環の「しくみ」から生じた静脈から「心臓」ができました。さらにまた、「腸管」の一部から魚類には浮き袋ができ、その上陸とともに浮き袋が「肺」になり、代謝をよくするために「腎臓」ができたのです。そして、その時代、時代の地球環境の変動に応じて、それぞれの「種」は「いのち」をつなぐという「はたらき」を促し高めるために、「からだ」の「かたち」を変えてまでも適応していったのです。それが現在の動物である牛・人間や昆虫の「かたち」なのです。

私たちは一人の人間を考えるとどうしても、直接「生・死」との関わりのある「脳・心臓・肺」が最も大事な臓器と考えがちです。しかし、生命の発生以来の「取り込み・消化・吸収・排泄」という「はたらき」の意味と、そのあとに生じた「脳・心臓・肺」の成り立ちを知ることによって、また、私たち一人ひとりの人生をトータルに観ることで、より正確に、より深く生命の本質にせまることができます。

たとえば、その証拠に「腸管」を丈夫にして、少し飢える程度にしてやると、元気で精神的にも、身体的にも生き生きと生きる自分を発見することになります（注5）。元気で「生きぬく」ことができます。また、自然に「死にゆく」ことができるのです。そこには、いつも「上腹部の柔軟性」との「かかわり」を発見できます。まさにこのことを土台にして、現代医学が陥っている迷路から抜け出し、現代医学のすばらしさを生かす新たなページが開かれるのです。

次回は、「消化管の運動機能」と「体液の循環と対流」を柱にして話を進めていきます。私が世界ではじめて提唱した「消化管ポンプ」（注6）という実際ある「はたらき」がキーポイントです。お楽しみに。

注1　『たまご理論で健康を回復し幸せな人生を送るために』中の「頭寒足熱」の実験参照　たまごビル健康講座　2002年10月12日（たまごビルホームページより引用）

注2　『現在の日本医療再生への提言』中の図2　2006年1月1日号参照

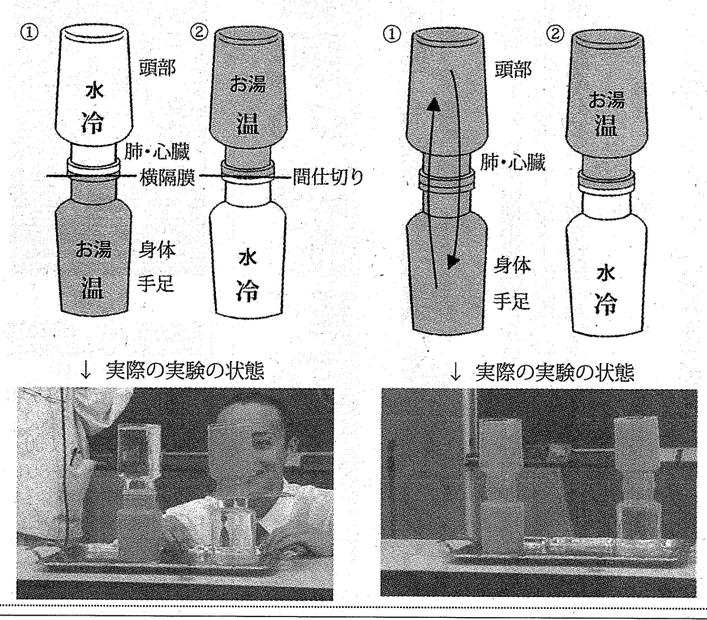
注3　『「腰痛」を予防する①　現代医学の最先端の現状と問題点』中の図1・2・3　2009年3月25日号参照

注4　『「上腹部の柔軟性」と「大陸移動説」』　2008年10月25日号参照

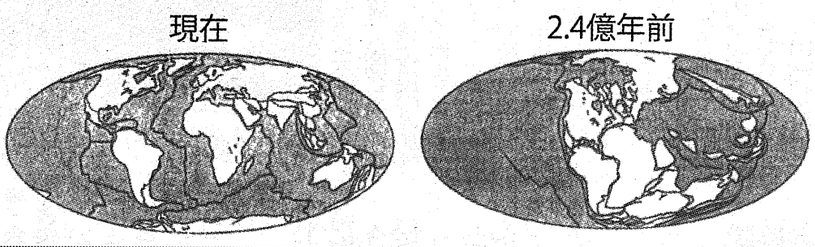
注5　『食と血液と呼吸の三つの流れを転換する』中の【Ⅲ はたして「脳・心臓・肺」が三大重要臓器か】　2010年8月25日号参照

注6　『血液の循環は消化管（胃腸）が支配する①・②・③』　それぞれ2010年9月25日・10月25日・11月15日号参照

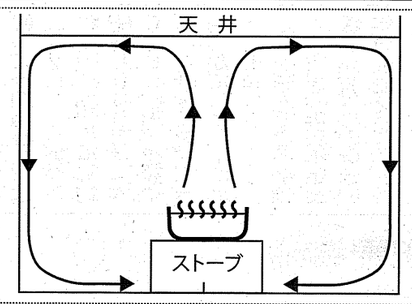
【図1】水の対流による頭寒足熱の実験



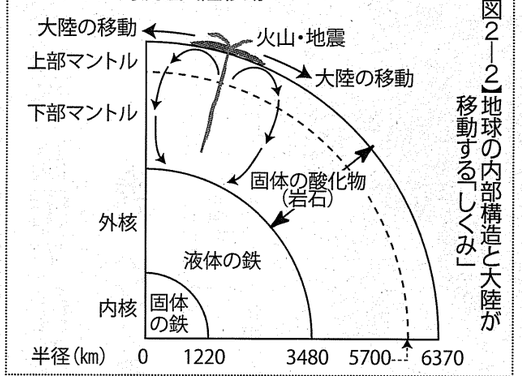
【図2―1】世界地図と大陸の移動



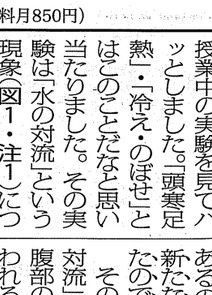
【図3】空気の対流による移動



【図2―2】地球の内部構造と大陸が移動する「しくみ」



今後のあるべき医療
健康体を活かす医療
たまご理論で病気のしくみを考える(5)



たまごビル院長 石垣　邦彦
〒581-0061　大阪府八尾市春日町1-4-4
電話 072(991)3398　FAX 072(991)4498
ホームページアドレス http://www.tamagobl.com/

河内新聞社　ホームページ
URLhttp://www.kawachi-shinbun.jp

全国の読者から好評・連載中

たまごビル石垣

たまごビル石垣
院長　石垣邦彦氏執筆の
【健康体を生かす医療】

河内新聞掲載バックナンバー
※掲載紙一部¥300で頒布します

《2006年》
4月号　肺転移後の前立腺ガンを内臓調整で克服
6月号　ガン・脳卒中・心筋梗塞は予防できる
8月号　腎臓ガンからの肺転移を克服し社会復帰
9月号　肺ガンの1次予防は内臓の活性化と禁煙
《2007年》
5月号　私たちの個人的な「死」も子や子孫・社会を活かす大切な役割
9月号　自殺の根本原因は食べられる「豊かさ」にある
《2008年》
2月号　薬に頼らず慢性疾患を予防・治療する
6月号　高齢者の肺炎予防のポイントは静脈還流にある
11月号　高齢者のくすりの副作用を予防する
《2009年》
5月号　③胃腸の弱りで上腹部が固くなり「腰痛」が発生する
8月号　⑥なぜ高齢者には「腰痛」と相前後して多種類の症状が体に現れるのか？
11月号　⑨「上腹部の柔軟性」をつくれば「腰痛」の予防ができる
11月5日号　インフルエンザは、かぜ？　＊ワクチン・タミフル・解熱剤は有効か
《2010年》
1月号　ガンは私たちの仲間だ！　＊新たな発想でガンの予防・治療・人生を考える
5月号　「つわり」も「肺炎」も元にある原因は消化管の筋肉の「動き」の弱り
8月号　食と血液と呼吸の三つの流れを転換する　＊果たして「脳・心臓・肺」が三大重要臓器か！
9月号　①血液の循環は消化菅（胃腸）が支配する

天山　日本料理 TENSAN
（株式会社トレビアン）
本店　TEL 991-6677　FAX 993-3355
支店　八尾市役所内食堂　TEL 991-3881
支店　八尾市文化会館内カフェプリズム　TEL 997-6666

八尾ビルディング株式会社
〒581-0004 八尾市東本町3-4-18
☎(072)991―6700
代表取締役 山口 智士

河内地域で事業展開！
しょうなん調剤薬局
有限会社しょうなん
代表取締役 薬剤師 堀江 昭伸
八尾市安中町8―3―20

八光殿では、
企業・団体の福利厚生に新たな価値をもたらす
CLUB8510法人会員
を取り扱っております。
詳しくはホームページ
http://www.8510.net/corporate.html
八光殿 法人会員　検索
あなたの街の葬儀社
八光殿
株式会社 中河内葬祭
0120-39-8510

好評分譲中　大型公園墓地
八尾 普泉寺霊園
バリアフリー　大駐車場完備
八尾市福栄町3丁目5番地
お問い合わせは ☎072-996-1111　普泉寺霊園　検索